



Title	受容過程について
Author(s)	小川, 了; OGAWA, Ryo
Citation	独語独文学科研究年報, 22, 45-51
Issue Date	1996-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26022
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P45-51.pdf



受容過程について

小川 了

1. 誤報

新聞報道によると、1994年7月26日午後十時放送のNHKラジオ第一放送「ラジオジャーナル」の中で、「イタリアのセリエAリーグ『ジェノア』に一年間移籍するサッカーの三浦知良選手が、今日成田空港からイタリアへ向けて出発しました」という報道がなされ、さらに「三浦選手は夫人の設楽りさ子さんとともに空港に現れると、海外へ出発する観光客に囲まれて一時大騒ぎになった」とも伝えられた。これは、翌日に放送予定だった原稿を誤って前日に読んでしまった誤報で、一時間後の定時ニュースにおいて「三浦選手の出発は二十七日の予定で、先ほどの報道は誤りでした」と訂正されたという¹⁾。

テレビ・ラジオのニュースや新聞の報道に対して、人は、起こった事件や出来事を誤解の無いように伝達してくれているといった（たいていは根拠のない）確信を持って接している。この誤報を耳にしたラジオの聴取者の多くも、ニュースの正誤など考えることなく、後半の夫妻が空港に現れるくだりを聞いた時、きっとその情景を思い浮かべて再現しただろう。新聞の記事を見る限り、分かりやすい表現で、日常的な具体性をもつ内容なので、この言語情報が脳裏に再現される過程は、いわば自動的で、聴取者の意識にはのぼらなかつただろう。しかし、この報道は誤報であり、一時間後には撤回されてしまう。つまり、聴取者の中に再現された情景は、その足場としていた事実性を失い、結果的には虚構のイメージとなる。

聞き手の理解や想定が最終的に裏切られるという点で、*garden-path jokes* と呼ばれる種類の小咄は²⁾、この誤報の例とよく似ている。そうした小咄では、情報の一部に対する誤った想定の下で話が進められるのだが、最終的な「落ち」の箇所での想定は通用しなくなり、修正を余儀なくされる。情報に対する一義的な解釈だと思われていた想定であっても、「その持続的な意味付与が行き詰まり、事後的な修正が必要になる場合にのみ、テキストの多義性が読者の意識に上³⁾り、自動的に引き出された最初の解釈は、より適切な別の解釈に取って代わられるのである。

garden-path jokes の「落ち」は代替解釈を提示してくれるので、それこそ「笑い話」として片づけられる。しかし、誤報の例に見られる無粋な「落ち」は前言の全面撤回なのであり、そう言われたところで、聴取者の中に再現されたイメージは消去のしようもなく、虚構の産物として宙づりのままそこに残っていただろう。こうした言語情報の受容と加工に関して「決定的な点は、語彙や意味内容が即座に、ある状況や事態、あるいは関係の表象に変換されるということだ。こうした諸表象は言語外的な知識に根ざしており、それらが、その想定や推測において、実際にテキストによって供されて

いる諸情報をはるかに越え出してしまうということもよくあることなのだ。しかし、このことは読者の意識には上らないのである⁴⁾。」

ある言語的な情報について、そこに述べられている出来事が事実であろうとなかろうと、それを何らかの表象に変換できるのは、グロスの言う言語外的な知識、つまり受容者が経験的に有している過去の記憶や知識、印象やイメージといった経験的に蓄積されたストックが活性化されるからである。言語情報に触れると、活性化されたストックの中からその都度必要な断片が取り出され、情報内容に見合う形へと加工される⁵⁾。ラジオの誤報を聞いた聴取者も、伝えられている情景を表象するために、様々な経験ストックの断片を動員したと考えられるが、この時、注目に値するのは、自分の目で視覚的な新情報として取り込んだのではない情景を、自分の中に蓄積されている過去のストックのみを用いて作りだしている点である。この過程は、創造的というよりは、再構成的と呼ばれる方が適切だろう。この再構成は、言語情報の受容者の個人的な経験の上に成立するものであるのだから、言語情報それ自体は一義的な内容であっても、そこから表象されるイメージは受容者によって異なっているはずだ。そのため、イメージは言語情報の内容に即しながらも、それを越えていく。表象イメージの中で、三浦夫妻はニコニコと微笑んでいるかもしれないし、少しうるさそうにまわりを見ながら歩いているかもしれない。取り巻きの人々の中には、ふたりを指さしてチャーチャー騒ぐ者もあれば、カメラのフラッシュをたく者もあるだろう。言語情報の中には述べられていない要素だが、芸能レポーターたちがマイク片手に夫妻につきまともっていても不思議ではない。

2. 私有化

言語情報が、受け手に受容された後に、その受容者の個人的な経験に基づいて、何らかの表象へと加工されていく過程を、ここでは、情報の「私有化」と呼ぶことにしたい。

情報の私有化が、それと意識されることなく自動的に行われるのは、1) 受容者の、情報の発信者に対する(経験的に抱いている)期待と確信が明確で、2) 情報の発信者が、受容者の期待や確信に添う形で情報を提供しており、3) その情報の表現が受容者にとって無理なく理解できるものであって、4) 情報の内容が受容者の経験を越えていない場合であると考えられる。誤報とは知らずにあのニュースを聞いていたラジオの聴取者の多くは報道内容を円滑に私有化したことと思われるが、結局は、条件の2)において、つまり事実の報道という点での期待や確信が、完全に裏切られたことになる。しかし、ここで重要なことは、この場合のように後から言語情報そのものが否定されたとしても、そのことが、いったん私有化によって表象されたイメージに影響を及ぼすことは(garden-path jokesの例のように直接的な代替解釈の可能性がない限り)ないだろう、という点である。また、私有化のプロセスは、自動的に行われうるけれども、それは刺激に対する機械的な反応ということとは全く異なるものだ。私有化とは、世界の事象を、受容者が自分に理解可能な範囲内で再構成しようと

する絶えざる試み、つまり、世界を自らの経験という安定した土台の上で捉えようとする能動的な行為、さらに言えば、個人が自らのアイデンティティを維持していくために必要な営みなのだとと言える。

3. 解釈共同体

私有化とは、安定した世界観を維持するために、情報の受容者が能動的に行う解釈の形態である、と言えるだろう。前述のように、私有化による解釈は、言語情報の内容を越えてしまう可能性を常に持っている。では、ある同一の言語情報に対して、複数の受容者が行う私有化が、人によってでんばらばらで、際限なく絶対的な個を目指しているのかというと、そうではない。もしそうなら、人間のコミュニケーションは困難に陥るだろう。個人的な経験をよりどころとする私有化によって解釈を行いながら、それが完全に独自のものになることはない、つまり、どんなに個人的な色に染まっても、その解釈を他の受容者と共有できる可能性が常にあることを、フィッシュの議論から確認しておこう。

彼は、黒板に（本来は課題として）書かれていた6人の人名のリストを指して、彼の学生たちに「勉強中の宗教詩の類が板書してあるから、これを解釈するように」指示した。学生たちの行った解釈作業の様子を述べた後、彼の考えに対して予想される批判に答えながら、フィッシュは次のように言っている。

「... あらゆる対象は発見されるのではなく作られるのであり、われわれが発動させる解釈戦略によって作られる、というのが結論である。しかし、だからといって、私は主観性に与するものではない。対象が作られる手段は社会的、慣習的なものであるからだ。つまり、詩や課題やリストを世界に生み出す解釈作業を行なう「あなた」は、共同体的な「あなた」であって、孤立した個ではない⁶⁾。」

さらに、

「文化は脳に浸透し、解釈行為は自分自身のものでなくなり、社会的に組織立てられたある環境における立場により、その人のもとにやってくる。だから、それは常に共有され公的なものである。となると、唯我論の恐怖や、無制限の自我による偏見強要の恐怖は根拠のないものになる。自我の活動（考えること、見ること、読むこと）を可能にする共同体的・慣習的思考範疇を離れて自我は存在しないからだ。意識を充たす概念が——どのような地位にある概念にせよ——文化的に生まれたものだといったん認識すると、無制限の自我とか、完全な、危険なまでに自由な意識といった概念は理解できないものになる⁷⁾。」

われわれ人間の個人的な経験が文字通りの意味で個人的なものではない以上、経験に基づく私有化による解釈の所産もその人の属する共同体が許す範囲内でしか個人的な色を帯びることはない。この

ことは、人によって異なる、同一情報に対する解釈と解釈の幅に制約を加えると同時に、われわれ人間のコミュニケーションの成立を保証してくれる考え方だと言えるだろう。

4. コミュニケーション①

コミュニケーションの始まりは、世界の事象の受容である。それは受容され、私有化による解釈を施された後、何らかの媒体を通じて他者に伝達される。発信者が自分の私有化した何かを他者に理解してもらいたいと思うのであれば、同じ共同体の成員として共有できる表象を相手が私有化するような表現を選ばなくてはならない。つまり、その共同体においては一義的だと見なされている表現を用いることになるのだ。そして、受容者の方でもそれを期待しており、相手と共有できる形で情報内容を私有化したいと望んでいる。コミュニケーションの成否は、表現の一義性（つまり私有化によって生じる表象）が、発信者と受容者の間で共有できるか否かにかかっているとと言えるだろう。「サボテンのトンカツはやっぱりおいしいよ」と言われて途方に暮れる者にとって、この情報は多義的であり、自動的な私有化を阻む情報だ。共有の可能性を前提として発信された言語情報が何かの理由で、受容者にとっては一義的に相手と共有できないものとして伝わっているケースだ。「サボテン」「トンカツ」「おいしい」という三者をうまくひとつの表象にまとめてくれるような経験のストックを、受容者は自分の中に見い出せない。「... 言語的な発話の多義性を可能な限り一義性へ変えることが、読み手（あるいは聞き手）にとっては、役に立つことだし、コミュニケーションを促進することである⁸⁾」ので、何とか再構成しようと、奇妙だと思いながらも、サボテンの棘は全部抜いてから揚げるんだろうな、豚肉ではさんであるのかな、などと見たこともない料理をむりやり表象してみる。しかし、この情報の発信者がそういう料理を食べているところを見たことがあるとか、そういう料理の話その人から聞いたことがあるという経験が受容者の側になれば、「やっぱり」という表現を、受容者の表象した奇妙なサボテン料理と結びつけることはできない。このように、自動的な私有化に挫折した時初めて、受容者は、自らの私有化のプロセスを意識する。それは、同じ共同体に属している他者からの情報を共有できないということなので、挫折した受容者は自分と共同体との間に溝ができたように感じ、不愉快で不安な状態に陥るだろう。今の例では、この受容者が「サボテン」という屋号のトンカツ屋があることを新情報として取り込むことができれば、彼のフラストレーションは氷解するのである。

「読み手の受容行為は、テキストに対して矛盾することなく意味を与えることができるという仮定に基づいている⁹⁾。」

意味を与えることができないということは、私有化による解釈ができないということで、それは、自分が当該の共同体の成員ではないということの意味する。もちろん解釈放棄の自由は常にどの受容者にも許されていることだが、もしその共同体の一員でありたいと望むのであれば、どのような対象

であっても、受容者は私有化を通して何らかの意味を構成するだろう。フィッシュの学生たちの解釈作業はそのいい例だ。この例に限らず、われわれ人間の日常的なコミュニケーションは受容と私有化に支えられている。「サボテンのトンカツ」の場合のように、何らかの新情報の獲得によって不安が解消されることもあるが、私有化による解釈の正誤が検証できない場合も多い。一般にわれわれがよりどころとしているのは、実際には、辞書的な意味での言語の一義性ではなく、同じ対象に関する、自分の私有化の解釈と他者の私有化の解釈がどこまで一致しているのかということである。そして、それは検証不可能なことが多く、そういう場合、われわれにできるのは、一致しているだろう、と信じることだけなのだ。われわれの日常生活においては、私有化による解釈の他者との共有に対する信念と不安とが背中合わせになっていることになる。

5. コミュニケーション②

どの共同体にも属していないという絶対的な孤立感に打ちのめされることなく、言ったことが本当に相手に通じたかどうか、あるいは逆に、相手の言っていることを正しく解釈できているかどうかといった際限のない不安に苛まれることもなく、アイデンティティの喪失の恐怖に怯えることもなく、なんとか、われわれは日常の生活を営んでいる。それは、「私」が、「私」の隣にいる「あなた」や「彼／彼女」に対して、何らかの点で共有できる世界に関する解釈を持っているだろうという、無根拠ではあるけれど、強烈な信念を抱いているからだ。情報の発信者としてであれ受容者としてであれ、「私」は「あなた」「彼／彼女」を知っていると、前提的に信じているのだ。

もし、情報発信者に対して、この前提となっている信念がなければ、あるいは、ないとはまではいかなくとも、はっきりと信念を抱くまでには至らないような場合には、受容者は情報内容だけではなく、発信者の意図をも私有化しようと試みるだろう。

こういう形での受容と私有化が、文学作品の解釈においてよく行われる。

文学作品というのは、円滑な私有化という点で考えると、受容者が（経験的な）期待と確信をそれに対して抱いているだけで、他の3つの条件が満たされているかどうかは不明である。この点は、たとえば、新聞記事やテレビ・ラジオと比較すると分かりやすいだろう。これらの言語情報が、他の3つの条件をかなりの程度満たしているということ、われわれは経験的に知っている。これに対して文学作品の場合は、読んでみなくては分からないのであり、言語情報の性質は作品毎に異なっている。つまり、文学作品と呼ばれるテキストのあり方は、その一回性という性格から、そもそも受容者による円滑な私有化を拒む傾向を持っていると言えるのかもしれない。

しかし、まさにその傾向の故に、人は作者の意図や文学作品を私有化せずにはおれないのだ。円滑な私有化の条件が満たされていないということは、積極的な意味で、「サボテンのトンカツ」という表現に触れた時、奇妙なサボテン料理を表象してもいいということだろう。もっと正確に言うと、個

々の作者の意図や文学作品というものに対する私有化による表象は、——慣習的に——他者のそれと共有する必要のないものなのである。共同体の成員であるという制約は依然としてあるのだが、日常的な私有化と比べて、作者の意図や文学作品に対する私有化においては個人的な側面がはるかに強く打ち出されているのである。円滑でない分、私有化のプロセスは、日常的に行われるそれと比べると困難だが、困難であると同時にひとつの表象へ到達する喜びをも伴う作業なのである。また、文学作品の一回性という性質から、われわれが現在持っている作者や文学作品に関する経験のストックは、新たにわれわれが受容する作者や作品の私有化に際しては、直接的には関わりを持ちえないのである。したがって、その際には再び、その作者や作品に見合う私有化を行うことになる。それ故、新聞記事においては可能な自動的な私有化は、文学作品に対しては行えないのである。

これとは異なるコンテキストにおいて、グロスは「文学性とは、読みにおける認知過程を意識させることだと定義できる¹⁰⁾」と述べている。つまり、自動的な読みを受容者に許さないということである。それも、garden-path jokes や「サボテンのトンカツ」の例のように、後から誤りを訂正したり、情報不足を補うことで解消されうるといった種類の脱自動化ではない。読む度に読者が自らの私有化のプロセスを意識しないではおれないような、そういう属性をグロスは文学的なテキストに見いだしているのである。

6. 文学研究としての作品解釈

文学は円滑な私有化を拒みながら、個人的な色彩の非常に強い私有化へと読む者を誘う。部分的で、ひょっとするとただの幻想かもしれないが、読者は、作品の中にいる間、共同体の成員であることを忘れることができるし、独自の世界をひそかに作り出すことができる。日常生活の場面とはちがって、そこでは他者のことを配慮しなくてもいいのだ。与えられる言語情報を受容し、私有化によって独自の表象へと加工しさえすればいい。共同体の一員として他者と足並みをそろえる必要はないのだ。これは、換言すると、他者とのコミュニケーションを図らなくてもいいということだ。一般の読者が、共同体の一員としての日常生活からいつとき逃れたいという理由で、作品の私有化を楽しむのは健全な姿であるし、それが文学（あるいは他の諸ジャンルの芸術）の重要な機能のひとつだろう。

しかし、それは、作品解釈は、文学研究の方法として健全だろうか。文学研究者の行う作品解釈が、一般読者のそれと同様に、他者とのコミュニケーションを放棄しているということはないだろうか、というのはつまり、作品を私有化によって解釈するだけで事足りるという、個への志向はないだろうか。文学研究における作品解釈にとって重要なことは、解釈の成果ではなくて、むしろ、そこへ至るまでのプロセスを記述することではないだろうか。プロセスの記述なら他者とのアクセスを保証してくれるけれども、解釈の成果は、結局のところ、その読者の個人的な世界観の反映でしかないのだから。

注

- 1) 1994年 7月27日付 朝日新聞、朝刊の記事より引用。
- 2) 今井邦彦 (1995) 「期待」と「効果」のコミュニケーション論 『月刊言語』第24巻第13号
: S.36-43 の中に garden-path jokes の具体的な例が挙げられているので、参考のために引用させてもらう。
「母親： 先生、どうしたらいいのでしょうか？ うちの息子と来たら隣の三歳の女の子と一緒にパンツを降ろして、そのう、あの場所を見せ合っているんです。
医師： いや、奥さん。それは別に心配するほどのことじゃありません。よくあることです。時期が来れば自然にやめるものですよ。
母親： でもやっぱり心配ですわ ……。それに息子の嫁も困っていますし ……。」
- 3) Gross, Sabine (1994) : Lese-Zeichen Kognition, Medium und Materialität im Leseprozess. Darmstadt: Wiss. Buchges. S.19
- 4) ebd. S.19
- 5) ebd. S.19 グロスはこちらで、"Schütte den Saft in das Gefäß" と "Schütte die Äpfel in das Gefäß" というふたつの文章が、読者に、Gefäß という単語の全く異なるイメージを喚起することを指摘している。
- 6) スタンリー・フィッシュ 『このクラスにテキストはありますか』 (小林昌夫訳) 1992 みすず書房 : S.117
- 7) ebd. S.121-122
- 8) Gross (1994), S.23
- 9) ebd. S.23
- 10) ebd. S.44

(大学院博士課程)